

4

アジア・アフリカでの国家形成の動き

第一次世界大戦後の民族運動

第一次世界大戦中、植民地は宗主国の戦争に兵力や物資の供給によって協力し、大きな犠牲を払ったが、戦

後それに対する十分な見返りを得ることはできなかった。パリ講和会議では、民族自決の原則がかかげられたものの、それはアジア・アフリカには適用されなかった。そのため、各地で独立をめざす民族運動がさかんになった。

民族運動を主導したのは、しばしば、欧米式の近代的教育を受けた官僚、軍人、弁護士、教師、医師、ジャーナリストなどであった。彼らは新しい政治思想を唱えたり、あるいは民族の伝統を再評価したりすることで、ナショナリズムや民族独立の理念を広めるとともに、組織的な政治運動の担い手となっていく。こうした運動は第一次世界大戦後には、農民をもまきこんで、幅広い階層を動員した大衆の運動に発展した。大戦中、欧米の勢力が戦争に集中している間に成長をとげた民族資本家も、民族運動を支援するようになった。また、コミンテルンの指導のもと、共産主義の理念による国家建設をめざす運動もはじまり、既存の民族運動と競合するようになった。

アジア・北アフリカの各地では、20世紀はじめごろから、女性たちが雑誌の刊行や団体の設立を通じて、女性を不公平にあつかう慣習や制度の改革、女子教育の普及、女性参政権などをうったえるようになっていた。大戦後にその活動はさらに拡大し、民族運動への参加もみられるようになった。

トルコ共和国とイランの独立

列強の取り決めた大戦後の秩序に挑戦し、その変更を勝ちとったのはトルコであった。かつての大国、オス

マン帝国は大戦での敗北によって占領され、1920年のセーヴル条約によって領土の分割が決定された。ギリシア軍は、この条約でオスマン帝国領として認められたアナトリア内陸部にも侵攻した。これより先、オスマン帝国軍人のムスタファ・ケマル（ケマル・アタテュルク）は、アンカラでトルコ国民議会を開催して臨時政府を樹立し、アナトリアにトルコ人の国民国家建設をめざした。ケマルは、1922年にギリシア軍をやぶり、イズミルなどを回復するとともに、スルタンを追放して、オスマン帝国を滅亡させた。

1923年に連合国とローザンヌ条約を締結し、独立の確保に成功したケマルはトルコ共和国を宣言し、自ら大統領に就任した。スルタンにかわって統治権のないカリフが